

Vākyapadīya 「〈能成者〉 詳解」(Sādhanaśamuddeśa) の研究 —VP3.7.55–58: 〈目的・行為主体〉(karmakarṭṛ) 論(1)

小川英世

0. バルトリハリ(Bhartrhari)は、Vākyapadīya 「〈能成者〉 詳解」章(Sādhanaśamuddeśa)第45詩節から第89詩節において〈目的〉(karman)というkāraṇaすなわち〈行為〉(kriyā)の〈能成者〉(sādhana)を論じている¹。そのうち第55詩節から第66詩節において彼が議論しているのは、pacyata odanaṃ svayam eva(「粥がおのずから煮える」)bhidyate kāṣṭham(「木片が割れる」)といった一般に受動形の自動・再帰用法(intransitive-reflexive use)と呼ばれる表現であり、これらの表現における粥や木片のように本来〈行為〉の〈目的〉として機能するものが〈行為主体〉(karṭṛ)となる、パーニニ文法家たちが〈目的・行為主体〉(karmakarṭṛ)と呼ぶところのものである²。本稿は、この〈目的・行為主体〉に関する基本的問題を論じた第55詩節から第58詩節を取り上げ、〈目的・行為主体〉の基本構造を考察するものである。当該詩節に対するヘーラーラージャの注釈(Prakāśa)を後半部において提示している。

第55詩節から第58詩節は次のとおりである。なお、〈目的・行為主体〉の議論は、第54詩節がその導入の役を果たしている。よって第54詩節もあわせて提示する。

¹本稿は、VP3.7.45–54を取り上げた小川[2007]の続編である。バルトリハリは、その十詩節においてパーニニの〈目的〉術語規則に従って〈目的〉を分類し、次に〈目的〉術語規則のなかでも基本規則であるA1.4.49からパーニニ文法家が導き出す〈実現対象〉(nirvartya)〈変容対象〉(vikārya)〈到達対象〉(prāpya)を定義し、さらに〈目的〉のkāraṇaとしての特質を明示している。

²この用法については辻[1974: 299]を見よ。

VP3.7.54: nirvṛtṭyādiṣu tat pūrvam anubhūya svatantratām /

kartrantarāṇāṃ vyapāre karma śampadyate tataḥ //

「その〔〈目的〉〕はまず実現行為(nirvṛtṭi)等の〔自己の〈行為〉に対する〕自主性を享受して、その後で、〔自己以外の〕別の〔kāraṇaである〕〈行為主体〉の〈目的〉となる」

VP3.7.55: tadvyāpāraviveke 'pi svavyāpāre vyavasthitam /

karmāpadiṣṭāṃ labhate kvacic chāstrāśrayān vidhīn //

「ある〔動詞語根の〕場合には、〔〈目的〉は]その〔〈行為主体〉の]〈ハタラキ〉がない場合にも自己の〈ハタラキ〉に対して〔自主的なものとして]存立する。〔そのような〈目的〉は]文法規則に依拠して、〈目的〉を根拠として教示されている文法操作を獲得する」

VP3.7.56: nivṛttapreṣaṇam karma svakriyāvayave sthitam /

nivartamāne karmatve sve karṭṛtve 'vatiṣṭhate //

「〈行為主体〉の]〈促進〉がない(nivṛttapreṣaṇa)、自己に存する部分的〈行為〉に立脚する〈目的〉は、〈目的〉性がなくなったときには自己の〈行為主体〉性に存立する」

VP3.7.57: tāni dhātvantarāṇy eva pacisidhyativad viduḥ /

bhede 'pi tulyarūpatvād ekatvaparikalpanā //

「〔ある文法家達は]pac(「煮る」)とsidh(「煮える」)のように、それらをまさに異なる動詞語根とみなす。異なる〔動詞語根〕であるとしても、

語形の同形性 (tulyarāpatva) から同一であると構想される」

VP3.7.58: ekadeśe samūhe ca vyāpārāṇaṃ pacādayaḥ /

svabhāvataḥ pravartante tulyarūpasamanvitāḥ //

「pac 等 [の動詞語根] は、同じ語形を具えている限り [単一なるものであり、対象表示の] 本性 (svabhāva) に基づいて、一部の〈ハタラキ〉と〈ハタラキ〉の集合の両者を表示する」

1. 議論の前提

1.1. 今料理〈行為〉、煮る〈行為〉にデーヴァダッタが〈行為主体〉、米 (taṇḍula) あるいは粥 (odana) が〈目的〉、鍋 (sthālī) が〈基体〉 (adhikaraṇa)、薪 (kāṣṭha) が〈手段〉 (karaṇa) として参与している事態を想定しよう。この事態に関して以下のような表現が成立する。

[1] *devadattaḥ sthālyāṃ kāṣṭhair taṇḍulān/odanaṃ pacati* (「デーヴァダッタは鍋の中の米・粥を薪で煮ている」)

[2] *devadattaḥ pacati* (「デーヴァダッタは煮ている」)

[3] *sthālī pacati* (「鍋が煮ている」)

[4] *kāṣṭhāni pacanti* (「薪が煮ている」)

[2]–[4] が示しているのは、〈行為主体〉、〈目的〉、〈手段〉といった *kāraka* は、自己に固有な〈行為〉を有し、その自己の〈行為〉に対して〈行為主体〉となるということである。煮る〈行為〉の実現に対して主要な〈行為主体〉 (pradhānakartṛ) であるデーヴァダッタに固有な〈行為〉とは、鍋をストーブに置く〈行為〉 (adhiśrayaṇa)、鍋に水を注ぐ〈行為〉 (udakāsecana)、鍋の中に米を入れる〈行為〉 (taṇḍulāvapana)、燃料補給の〈行為〉 (edhopakarṣaṇa) 等であり、〈基体〉である鍋に固有な〈行為〉とは、米の収容〈行為〉 (sambhavanakriyā) や保持〈行為〉 (dhāraṇakriyā) であり、〈手段〉である薪に固有な〈行為〉とは燃焼〈行為〉 (jvalanakriyā) である³。

³Vts. 7–10 on A1.4.23: siddham tu pratikāraṇam kriyābhedāt pacādīnāṃ karaṇādhikaraṇayoḥ kartṛbhāvaḥ // adhiśrayaṇodakāsecanataṇḍulāvapanaidho'pakarṣaṇakriyāḥ pradhānasya kartuḥ pākāḥ // droṇāṃ pacaty ādhakam

1.2. ところで〈目的〉である米／粥に関連して次のような表現が成立する。

[5] *devadattas taṇḍulān odanaṃ pacati* (「デーヴァダッタは米を煮て粥を作っている」)

[6] *devadattas taṇḍulān pacati* (「デーヴァダッタは米を煮ている」)

[7] *devadatta odanaṃ pacati* (「デーヴァダッタは粥を煮ている」)

[8] *taṇḍulā vikliḍyanti* (「米が柔らかくなっている」)

[9] *odano nirvartate* (「粥が実現している」)

〈目的〉である米／粥もまた自己に固有な〈行為〉を有するのである。そしてバルトリハリが VP3.7.54 において述べているように、〈実現対象〉と特徴付けられる〈目的〉は実現 (nirvṛtti) という〈行為〉、〈変容対象〉と特徴付けられる〈目的〉は変容 (vikriyā) という〈行為〉、〈到達対象〉と特徴付けられる〈目的〉は〈顕現の獲得〉 (ābhāsāpatti) という〈行為〉に対して自主的なものすなわち〈行為主体〉である。主要なる〈行為主体〉は、そのことを期待することによって〈実現対象〉等の〈目的〉を〈行為〉の対象とする。このことは、〈目的〉は自己の〈行為〉に対して自主的であることではじめて主要なる〈行為主体〉の〈促進〉 (praiṣa, preṣaṇa) と特徴づけられる実現化作用 (nirvartā) 、生成作用 (bhāvanā) といった〈行為〉に対して〈目的〉となることを意味する⁴。

それでは〈目的〉に関しても〈基体〉や〈手段〉と同じように以下のような表現が可能となるかと言えばそうではない。

[10] **taṇḍulāḥ pacanti* (「米が煮えている」)

[11] **odanaḥ pacati* (「粥が煮えている」)

鍋や薪を〈行為主体〉と表現する場合と同じように、米あるいは粥を〈行為主体〉として表示するために、主要なる〈行為主体〉であるデーヴァダッタの〈行為〉を表示する、〈行為主体〉

pacatīti sambhavanakriyā dhāraṇakriyā cādhikaraṇasya pākāḥ // edhāḥ pakṣyanty ā viklitter jvaliṣyanti jvalanakriyā karaṇasya pākāḥ //

⁴VP3.7.54. 小川 [2007: 42-43] を見よ。

を表示する *parasmaipada* 接辞で終わる動詞語根 *pac* の派生形が使用されるということはない。〈目的〉を〈行為主体〉として表示するためには、ある特定の意味の含意と *parasmaipada* 接辞で終わる動詞語根の派生形の使用が必要なのである。

2. 実現容易性

ここで以下のカーティアーヤナの言明とそれに対するパタンジャリの解説を見てみよう。カーティアーヤナは3で説明する A3.1.87 の定式化の目的に関して次のように述べている。

Vt. 5 on A3.1.87: *karmakartari kartṛtvam svātantryasya vivakṣitatvāt //*

「〈目的・行為主体〉には〈行為主体〉性がある。自主性が表現しようと意図されるから」

この *vārttika* は、〈目的〉には〈行為主体性〉はあり得ないから A3.1.87 の定式化は無意味であるという意図から発せられた定式化目的に関する質問に対する答えである。そしてこの *vārttika* をパタンジャリは次のように説明している。

「〈目的・行為主体〉には〈行為主体〉性が存在する。

[問] 何故か。

[答] 自主性が表現しようと意図されるからである。まさに〈自主性〉に依拠して、この〔〈目的・行為主体〉の〕領域では、〈行為主体〉が表現しようと意図される。

[問] しかし、現に存在する (*sat*) 自主性が表現しようと意図されるのか、それとも、〔存在しない自主性が〕単に表現しようと意図されるに過ぎない (*vivakṣāmātra*) のか。

[答] 現に存在する〔自主性が表現しようと意図される〕と答えよう。

[問] どうしてそう分かるのか。

[答] 次の事例すなわち *bhidyate kuśūlena* (「穀物瓶が壊れる」) においては、〔穀物瓶〕以外には〈行為主体〉は観察されず、〔穀物瓶には崩壊〈行為〉 (*viśaraṇa*) という〕〈行為〉が見られる⁵。

⁵Pradīpa on MBh ad A3.1.87 (III.168): *kriyā ceti / viśaraṇakriyety arthaḥ /*

[問] しかし君は〔崩壊〕〈行為〉は身体を有するものだけを〈行為主体〉とするべきであるとは思わないのか⁶。一方、風 (*vāta*) も熱 (*ātāpa*) も時間 (*kāla*) も〈行為主体〉ではあり得ないであろう。

[答] もし風・熱・時間のいずれかが〔崩壊〈行為〉の〕〈行為主体〉であり得るとするならば、〔*vātaḥ kuśūlam bhinatti* (「風が穀物瓶を壊す」といった表現が〕確立されるであろう。しかし実に、風もなく (*nivāta*)、雨もあたらぬ (*nirabhivaṛṣa*) 場所にあり作られて間もない (*acirakālakṛta*) 穀物瓶がまさにおのずから壊れるとき、その穀物瓶にはこの穀物瓶以外にそれと異なる〈行為主体〉は存在しない。

[反論] まずもって、この場合すなわち他に〈行為主体〉が存在しない場合にはこのように〔*kuśūlaḥ svayam eva bhidyate* (「穀物瓶がまさにおのずから壊れる」と) 言うことができるとしても、しかし以下の事例すなわち *lūyate kedāraḥ svayam eva* (「田圃がまさにおのずから刈り取られる」) において、どうして〔田圃以外に〈行為主体〉が〕存在しないことがあろう。なぜならその事例においては、そのデーヴァダッタが鎌を手にして〔田圃の〕至る所を飛び回っているのが観察されるからである。

[答論] この場合もその実現容易性 (*sukaratā*) と呼ばれるもの、それを〔有する稲の分割〈行為〉 (*dvidhābhavanalakṣaṇakriyā*)⁷〕には、この田圃以外にはそれと異なる〈行為主体〉は存在しない⁸。

⁶この質問の意図をカイヤタは次のように説明している。Pradīpa on MBh ad A3.1.87 (III.168): *kiñ ca bho iti / kāraṇābhāve viśaraṇākhyaḥ kāryābhāvād avāśyaṃ kenacid vātādinā kāraṇena bhāvyaṃ iti bhāvah /* (「しかし君は…思わないのか」: 意図するところは次のことである。原因がなければ、崩壊〈行為〉と呼ばれる結果は生起しないから、風等といった何らかの原因が必ずあるべきである」)

⁷カイヤタは、パタンジャリは「実現容易性」(*sukaratā*) という語によってそれを実現するに容易なその実現の対象としての〈行為〉を意図していると説明している。Pradīpa on MBh ad A3.1.87 (III.169): *sukarateti / dvidhābhavanalakṣaṇakriyety arthaḥ /*

⁸MBh on A3.1.87 (II.67.12–21): *karmakartari kartṛtvam asti / kutaḥ / svātantryasya vivakṣitatvāt / svātantryeṇaivātra kartā vivakṣitaḥ / kiṃ punaḥ sataḥ svātantryasya vivakṣāhosvid vivakṣāmātram / sata ity āha / katham jñāyate / iha bhidyate kuśūleneti na cānyaḥ kartā dr̥ṣyate kriyā copalabhyate / kiṃ ca bho vīgrahavataiva kriyāyāḥ kartrā bhavitavyam na punar vātāpakālā api*

次の文を見よ。

- [12] *bhidiate kuśūlena* (「穀物瓶が壊れる」)
 [13] *vātaḥ kuśūlam bhinatti* (「風が穀物瓶を壊す」)
 [14] *kuśūlaḥ svayam eva bhidyate* (「穀物瓶がまさにおのずから壊れる」)
 [15] *devataḥ kuśūlaḥ lunāti* (「デーヴァダッタが田圃の稲刈りをしている」)⁹
 [16] *lūyate kedāraḥ svayam eva* (「田圃がまさにおのずから刈り取られる」)

パタンジャリは vt. 5 を説明するために上記の文の意味を分析している。その分析は〈目的〉の〈行為主体〉としての表現に関して以下の諸点を明らかにする。

(1) 動詞語根が自動詞化 (akarmaka) されること。

この点は [12] において明らかである。動詞語根 *bhid* (「分割する、壊す」) は〈目的〉を有する動詞語根 (sakarmaka) である。しかし、*bhidiate* の *-te* は〈行為〉 (bhāva) を表示するから、それは自動詞化されている。A3.4.69 により〈行為〉 (bhāva) を表示する接辞は〈目的〉を持たない動詞語根 (akarmaka) の後に起こる。

(2) 〈目的〉が自己の〈行為〉に対して自主的なものとして表現しようと意図されること。

(3) 「まさにおのずから」 (svayam eva) という限定が示唆するように、〈目的〉自体が〈行為主体〉として機能し、〈目的〉以外に〈行為主体〉が想定されないこと。

このことは〈行為〉実現に当該の〈目的〉以外の原因を想定しないことを意味する。さらに、〈行為主体〉として表現されるものは、〈目的〉として機能し得るものである。「穀物瓶がま

kartāraḥ syuḥ / bhavet siddham yadi vātāpakālānām anyatamaḥ kartā syāt / yas tu khalu nivāte nirabhivarṣe 'cirakālakṛtaḥ kuśūlaḥ svayam eva bhidyate tasya nānyaḥ kartā bhavaty anyad aṭaḥ kuśūlāt / yady api tāvad atraitac chakyate vaktuḥ yatrānyaḥ kartā nāstīha tu katham na syāt lūyate kedāraḥ svayam eveti yatrāsau devadatto dātrahastaḥ samantato viparipatan dr̥śyate / atrāpi yāsau sukaratā nāma tasyā nānyaḥ kartā bhavaty anyad aṭaḥ kedārāt / kuśūla は Vedavrata 版では *kuśūla*。意味に違いはない。

⁹ヘーラーラージャによれば、この表現における *kuśūla* (= *kuśūla*) は、転義的に稲 (*vṛ̥hi*) を指示する。VP3.7.56.9 を見よ。

さに自ずと壊れる」という表現においては穀物瓶は自壊する。しかし、この表現の場合も穀物瓶が破壊<行為>の<目的>として機能し得ることが前提される。

(4) 〈目的〉以外に〈行為主体〉が想定される場合も、〈目的〉以外の〈行為主体〉の〈行為〉が表現しようと意図されないこと。

(5) 〈行為〉の実現容易性が〈目的〉の〈行為主体〉としての表現によって含意される意味であること。

穀物瓶であれば、その割れ易さであり、田圃であれば、その稲の刈取り易さが〈行為〉の実現容易性である。

バットージ・ディークシタ (Bhaṭṭoji Dīkṣita) は、これらの点を以下のように説明している。その説明は実に的確である。

「[〈行為〉の]卓越した実現容易性 (saukaryātiśaya) を標示するために、〈行為主体〉の〈ハタラキ〉が表現しようと意図されないとき、[〈行為主体〉]以外の *kāraka* も〈行為主体〉という術語を獲得する。なぜなら、[*kāraka* はすべて] 自己の〈ハタラキ〉に対して自主的なものだからである。それゆえ、[〈行為主体〉としての表現] 以前には〈手段〉性等が存在していても、[以下のように〈行為主体〉として表現しようという] 今は〈行為主体〉性に基づいて〈行為主体〉を表示するために L 音が起こる。

sādhv asiś chinatti (「この刀剣はよく切れる」)

sādhu kāṣṭhāni pacanti (「これらの薪はよく煮る」)

sādhu sthālī pacati (「この鍋はよく煮る」)

一方、〈目的〉を〈行為主体〉として表現しようと意図する場合には、一般的には、[その表現] 以前には〈目的〉を有する [動詞語根] (sakarmaka) であつたものも〈目的〉をもたない [動詞語根] (akarmaka) となる。それら [〈目的〉をもたない動詞語根となつたものの] 後には、〈行為〉 (bhāva) と〈行為主体〉の表示のために L 音が導入される¹⁰。[先ず、〈行為〉 (bhāva) を表示する L が導

¹⁰A3.4.69 *laḥ karmani ca bhāve cākarmakebhyah* // (「動詞語根の後に導入される L 接辞は、〈行為主体〉あるいは〈目的〉を表示し、〈目的〉をもたない動詞語根の後に導入される L 接辞は、〈行為主体〉あるいは〈行為〉 (bhāva) を表示する」)

入される場合は以下の通りである。]

pacyate odanena (「粥が煮える」)

bhidyate kāṣṭhena (「木片が割れる」)

しかし、〈行為主体〉を表示する [L音が導入される場合は、A3.1.87の適用領域である]¹¹

〈手段〉である刀剣の場合、もしその刃先が非常に鋭利であるならば、使い手が強く振り下ろすことなく、まさにおのずから切断対象を切ることができる。同じく〈手段〉である薪の場合、よく乾燥したものであれば、風を送ったりすることなくよく燃焼して煮る〈行為〉を実現する。また〈基体〉である鍋ならば、もしそれが薄手の鍋ならば、熱伝導がよい。〈目的〉に関する〈行為〉の実現容易性も同様に考えることができる。この〈目的〉に関する〈行為〉の実現容易性を表現するために、〈目的〉が〈行為主体〉として表現される。

3. A3.1.87

〈目的〉を〈行為主体〉として表現するためには、〈目的〉の〈行為〉を表示する動詞語根の後に、*bhāva* (〈行為〉) を表示する接辞か〈行為主体〉を表示する接辞が導入される。後者の場合が特別の規則 A3.1.87の適用領域である。

次の文を見よ。

[17] *devadatta odanaṃ pacati* (「デーヴァダッタが粥を煮ている」)

[18] *odanaḥ pacyate devadattena* (「粥がデーヴァダッタによって煮られている」)

[19] *odanaḥ pacyate svayam eva* (「粥がまさにおのずから煮えている」)

[20] *pacyate odanena* (「粥が煮えている」)

[17]における *pacati* の接辞 *-ti* は、〈行為主体〉を表示する。そしてこの場合の〈行為主体〉はこの接辞が指示するデーヴァダッタである。[18]

¹¹SK 2766 (A3.1.87): *yadā saukaryātiśayaṃ dyotayitum kartṛvyāpāro na vivakṣyate tadā kārakāntarāny api kartṛsamjñāṃ labhante, svavyāpāre svatantratvāt / tena pūrvaṃ karaṇatvādisattve 'pi samprati kartṛtvāt kartari lakārah / sādhu asiś chinatti / kāṣṭhāni pacanti / sthāli pacati / karmaṇas tu kartṛtvavivakṣāyāṃ prāk sakarmakā api prāyēnākarmakāḥ / tebhyo bhāve kartari ca lakārah / pacyate odanena / bhidyate kāṣṭhena / kartari tu— /*

における *pacyate* の接辞 *-te* は、〈目的〉を表示する。そしてこの接辞が指示するのは粥である。デーヴァダッタを〈行為主体〉として表示するのは *devadattena* の第三格接辞 (*-tā*) である。[19]における *pacyate* の接辞 *-te* は、〈行為〉 (*bhāva*) を表示する。 *odanena* の第三格接辞 (*-tā*) は、〈行為主体〉を表示する。一方、[19]における *pacyate* の接辞 *-te* は、〈行為主体〉を表示する。そしてこの接辞が指示するのは〈目的〉であった粥である。このような [19] における *pacyate* の派生のために特別にパーニニが用意したのが A3.1.87 である。

A3.1.87 *karmavat karmaṇā tulyakriyaḥ* //

「〈目的〉に存する〈行為〉と同様の〈行為〉を有する〈行為主体〉は、〈目的〉に準ずる文法操作を受ける」

この規則には A6.1.68 *kartari śap* から *kartari* (*kartṛ* 「〈行為主体〉」, loc. sg.) が継起し、格変換 (*vibhaktivipariṇāma*) によって *kartā* (nom. sg.) が読み込まれる。この規則中の *karman* (「目的」という語は、〈目的〉に存する〈行為〉を表示する¹²。複合語 *tulyakriya* は、*bahuvrīhi* としてその〈行為〉 (*kriyā*) が *x* と同様の (*tulya*) 〈行為主体〉を指示する。この場合 *x* は *karman* によって意図される〈目的〉に存する〈行為〉である。*karmavat* (「〈目的〉に準ずる」という語は、当該規則が拡大適用規則 (*atideśasūtra*) であることを示す。そして、ここにおける拡大適用は、意図されている〈行為主体〉が〈目的〉に依拠する文法操作を獲得するという文法操作 (*kārya*) の拡大適用であり、その〈行為主体〉が〈目的〉と呼ばれるという呼称 (*vyapadeśa*) の拡大適用ではない。

重要なのは、「〈行為主体〉が〈目的〉に存する〈行為〉と同様の〈行為〉を有する」ということをどう理解すべきかということである。パタンジャリは複合語 *tulyakriya* の言及意図について次のように説明している。

「[問] 「[〈目的〉に存する〈行為〉と] 同様の〈行

¹²KV on A3.1.87: *karmaṇi kriyā karma / SK 2766 (A3.1.87): karmasthayā kriyayā /*

為)を有する[〈行為主体〉](*tulyakriya*)と何のために言われているのか。

[答] [もしそれが言及されず当該規則が *karmavat karmanā* と定式化されたとすれば、「〈目的〉と共に理解せしめられる〈行為主体〉は〈目的〉に準ずる文法操作を受ける」¹³ というように解釈し得るから] *pacaty odanam devadattaḥ* (「デーヴァダッタは粥を煮ている」) [と表現される事態におけるデーヴァダッタという〈行為主体〉に関して〈目的〉に準ずる文法操作が起こる。この表現においては〈目的〉である粥と共に〈行為主体〉であるデーヴァダッタが理解される。]

[反論] *tulyakriya* という語を言及したとしても、この場合 [同じことが] 結果する。なぜなら、この場合も〈行為主体〉 [であるデーヴァダッタは] 〈目的〉と共通の (*tulya*) 〈行為〉を有するからである¹⁴。

[答論] [規則中の] *tulyakriya* という語によって [〈行為主体〉が〈目的〉と] 〈行為〉を共通にするということ (*samānakriyatva*) が表示されているということはない。

[問] それでは何が表示されているのか。

[答] 〈目的〉であるあるもの *x* が 〈行為主体〉となっても、その *x* が 〈目的〉の状態にあったときあるあり方で存在していた 〈行為〉がそのあり方で観察されるとき、その *x* は 〈目的〉に存する 〈行為〉と同様の 〈行為〉を有する 〈行為主体〉として 〈目的〉に準ずる文法操作を受ける」¹⁵

¹³Pradīpa on MBh ad A3.1.87 (III.164): *pacaty odanam iti / saharthe 'pi tṛṭiyā vijñāyeta, tena karmanā saha yaḥ kartā pratipādyata iti bhāvaḥ /*

¹⁴Pradīpa on MBh ad A3.1.87 (III.164) : *atrāpīti / tulyaśabdasya sādharāṇavacanātvaḥ kartṛkarmasādhyatvāc cātra kriyāyā iti bhāvaḥ /*

¹⁵MBh on A3.1.87 (II.66.5–8): *tulyakriya iti kimartham / pacaty odanam devadattaḥ / tulyakriya ity apy ucyaṃāne 'tra prāpnoti / atrāpi hi karmanā tulyakriyaḥ kartā / na tulya-kriyagrahaṇena samānakriyatvam abhidhīyate / kiṃ tarhi / yasmin karmaṇi kartṛbhūte 'pi tadvat kriyā lakṣyate yathā karmaṇi sa karmanā tulyakriyaḥ kartā karmavad bhavātīti /* ジネンドラブッディ (Jinendrabuddhi) は当該 Bhāṣya 中の難解な一節 *yasmin karmaṇi kartṛbhūte 'pi tadvat kriyā lakṣyate yathā karmaṇi sa karmanā tulyakriyaḥ kartā karmavad bhavati* を次のようにパラフレーズしている。Nyāsa on KV ad A3.1.87: *yasmin karmaṇi kartṛbhūte 'pi katravasthāyām pratipanne 'pi tādrśi kriyā lakṣyate yādrśi karmavasthāyām sa kartā karmavad bhavati /* この解釈では *tulyakriya* の *tulya* は類似性 (*sādrśya*) を意味する。Pradīpa on MBh ad A3.1.87 (III.164): *yasminni ity / sādrśya-*

パタンジャリによれば、〈行為主体〉が〈目的〉に存する 〈行為〉と同様の 〈行為〉を有するということは、あるものが 〈目的〉として特定の 〈行為〉の実現に参与したときと同様の仕方であるものがその特定の 〈行為〉に今参与しているということであり、そのものが 〈目的〉のときのそれに固有な 〈行為〉の担い手として 〈行為主体〉となるということの意味する。実質的には同一の 〈行為〉の基体が 〈目的〉と 〈行為主体〉の状態の差異を得るということである¹⁶。まさにこのような 〈行為主体〉をパーニニ文法家は 〈目的・行為主体〉 (*karmakartr*)、すなわち「〈目的〉であった 〈行為主体〉」と呼ぶ。それが関係する 〈行為〉に対して 〈行為主体〉であり、その 〈行為〉が生起する事態を表現する文の派生において、〈行為主体〉ではなくて 〈目的〉の状態を根拠とする文法操作の適用が起こる *kāraka* がこう呼ばれる¹⁷。

4. 文法操作拡大適用

〈目的・行為主体〉を表示する L 接辞が導入される時、当然ながら 〈目的〉に準ずる文法操作の適用によって、[18][20] の *pacate* 派生のための以下の規則が適用され、*ātmanepada* 接辞の導入、*yak* 接辞の導入という文法操作が適用される。

A1.3.13 bhāvakarmanoh //

vāci tulyaśabda āśrīyata ity arthaḥ /

¹⁶Pradīpa on MBh ad A3.1.87 (III.164): *karṭṛkarmāvasthābhedaḥ ca ekasyā api kriyāyā bhedaśrayaṃ sādrśyam upapadyate /*

¹⁷Uddyota on MBh ad A3.1.87 (III.169): *evaṃ ca saukaryātiśayavivakṣayā vidyamāno 'pi karṭṛvyāpāro na vivakṣyate / kintv anekārthatvād dhātūnām karmaniṣṭhavyāpāramātraparatā tadā karmanāḥ kartṛtve karmanā tulyakriya ity atrāvasthāntarīyakarmanā tulyakriyatvam ity evārtho vivakṣita iti dik /* (「そしてこのような場合、[〈行為〉の] 卓越した実現容易性を表現しようという意図に基づいて、〈行為主体〉の 〈ハタラキ〉は現に存在しているも表現しようとは意図されない。反対に、動詞語根は複数の意味を表示するから、〈目的〉に存する 〈ハタラキ〉だけが意図される。その場合には 〈目的〉が [その 〈ハタラキ〉に対して] 〈行為主体〉となる。この場合 A3.1.87 というこの規則においては、[〈目的〉に準ずる文法操作を受ける 〈行為主体〉は 〈行為主体〉とは] 別の状態にあった 〈目的〉に存する 〈行為〉と同様の 〈行為〉を有するというまさにこの意味が意図されている。これが一般的議論の方向である」

「〈行為〉(bhāva) あるいは〈目的〉が表示されるべきとき、ātmanepada 接辞が選択される」

A3.1.67 sāvadhātuke yak //

「〈行為〉(bhāva) あるいは〈目的〉を表示する sāvadhātuka 接辞が後続するとき、動詞語根の後に yak 接辞が起こる」

5. VP3.7.55–56

5.1. パタンジャリは〈行為主体〉の基本的機能を他の kāraka を活動せしめる点 (pravartaka) に求めた。バルトリハリの言葉では「他の kāraka がそれに依存して活動するところのもの」(tadadhīnapravṛttitva)¹⁸と規定される特質である。例えば納屋にしまわれている限りでは鎌も〈手段〉としては機能し得ない。それが〈手段〉として機能するのはそれが実際にデーヴァダッタによって使用されているときである。

次の文を見よ。

- [21] *devadatta odanaṃ pacati* (「デーヴァダッタが粥を煮ている」)
 [22] *devadatta odanaṃ vikledayati* (「デーヴァダッタが粥を軟らかくしている」)
 [23] *devadatta viklidyantam odanaṃ prerayati* (「デーヴァダッタが軟化している粥を〔軟化に向けて〕促している」)
 [24] *odano viklidyati svayam eva* (「粥がまさにおのずから軟化している」)

VP3.7.54 から明らかなように、粥は軟化するものすなわち軟化〈行為〉(viklitti) の基体であるからこそデーヴァダッタによって〈目的〉として任用 (viniyoga) され、デーヴァダッタの軟化せしめる〈行為〉に対して〈目的〉として機能する。このことは [23] が明瞭に示している。

しかしながら [24] のように粥の軟化の実現容易性が表現される場合には、〈行為主体〉であるデーヴァダッタの軟化せしめる〈行為〉は考慮されず、〈目的〉である粥に関して、粥とそれ自体の〈行為〉の関係だけが捉えられ、〈目的〉である粥はそれ自体の〈行為〉に対して自主的なものすなわち〈行為主体〉として表現さ

¹⁸VP3.7.101. 小川 [2006: 95] を見よ。

れる。〈目的・行為主体〉は〈行為主体〉に他ならない。しかし、それが〈目的〉と呼ばれるのはヘーラーラージャが言うように、過去状態の理解 (bhūtapūrvagati) に基づく¹⁹。〈目的・行為主体〉は〈行為主体〉として表現される以前は〈目的〉である。

VP3.7.55 は、このような〈目的・行為主体〉に関してパーニニが A3.1.87 を特別に規定していることを指摘し、一方、VP3.7.56 は、〈行為〉の実現容易性の表現においては、〈目的〉であったものが〈目的〉性を失って、それ自体で〈行為主体〉となることを述べている。〈目的〉性を失うということは主要な〈行為主体〉の〈行為〉に対する従属性を失うということである。

5.2. バルトリハリは、VP3.7.55 において〈目的・行為主体〉表現が成立する〈行為〉を表示する動詞語根には制限があることを述べている。彼は、「ある〔動詞語根の〕場合には」(kvacit) と述べた。この制限はバルトリハリによって詳細に議論されるが、ここでは次のことを指摘するにとどめる。

ヘーラーラージャによれば、〈目的・行為主体〉表現が成立するのは以下の動詞語根の場合である。

- それが表示する bhāva が〈目的〉に存する動詞語根 (karmasthabhāva)
- それが表示する kriyā が〈目的〉に存する動詞語根 (karmasthakriyā)

バルトリハリは次の vārttika を念頭に置いている。

Vt. 3 on A3.1.87: karmasthabhāvākānām karmasthakriyānām ca //

『その表示する bhāva が〈目的〉に存する〔動詞語根〕あるいはその表示する kriyā が〈目的〉に存する〔動詞語根が表示する〈行為〉の〕〈行為主体〉[だけ] が〈目的〉に準ずる文法操作を受ける』という追加規定が定式化されるべきであ

¹⁹VP3.7.56.3 を見よ。

る」²⁰

この場合の bhāva は運動のない (aparispandana) 〈能成者〉によって実現される動詞語根の意味であり、静的な行為である。一方 kriyā は運動する (sapispandana) 〈能成者〉によって実現される動詞語根の意味であり、動的な行為である²¹。

A3.1.87 に対する Kāśikāvṛtti に次の詩節が挙げられている。

karmasthaḥ pacater bhāvaḥ karmasthā ca bhideḥ kriyā /
māsāsbhāvaḥ kartṛsthaḥ kartṛsthā ca gameḥ kriyā //
「動詞語根 *pac* は〈目的〉に存する bhāva を表示する。動詞語根 *bhid* (「割る」「壊す」) の意味は〈目的〉に存する kriyā である。「彼は一ヶ月の間座っている」(māsam āste) における動詞語根 *ās* (「座る」) の意味は bhāva であり、〈行為主体〉に存する。動詞語根 *gam* (「行く」) は〈行為主体〉に存する kriyā を表示する」²²

6. VP3.7.57–58

6.1. バルトリハリの第 57–58 詩節における議論の前提にあるのは以下の vārttika である。

Vt. 2 on A3.1.87: karma dr̥ṣṭaś cet samānadhātu //
「同じ動詞語根 (samānadhātu) に関して、[それが表示する〈行為〉に対する〈行為主体〉が]〈目的〉

²⁰MBh on vt.3 ad A3.1.87 (II.66.16–17): karmasthabhāvakānām karmasthakriyānām vā kartā karmavad bhavātīti vaktavyam / kartṛsthabhāvakānām kartṛsthakriyānām vā kartā karmavan mā bhūt itī /

²¹Pradīpa on MBh ad A3.1.87 (III.166): aparispandana-sādhanasādhyo dhātvartho bhāvaḥ / sapispandanasādhanasādhyas tu kriyā / Ogawa [2005: 159–161] を見よ。

²²動詞語根 *pac* は「料理する」「煮る」の意味以外にも「焼く」等も意味する。何を意味するかでそれが意味する〈行為〉の性格付けが変わる。次のハラダッタの説明を見よ。Padamañjarī on KV ad A3.1.87: pacyate ghaṭa ity atra taddeśasyaiva ghaṭasya pāka itī bhāvo 'sau bhavati, karmasthaś ca pacyate odana ity atra parispandata eva pākyasya pākābhiniṣvṛtīti itī karmasthaiva paceḥ kriyā bhavati / (「*pacyate ghaṭaḥ* (「瓶が [まさにのおのずから] 焼ける)」というこの事例においては、まさに同じ場所にある瓶が焼き固められるから、この [*pac* の意味] は bhāva であり、そして〈目的〉に存する。*pacyate odanaḥ* (「粥が [まさにのおのずから] 煮える)」というこの事例においては、まさに運動している煮る行為の対象に煮る行為が実現されるから、*pac* の [意味] は kriyā であり、まさに〈目的〉に存する)」

として経験されているならば、[その〈行為主体〉に関して〈目的〉に準ずる文法操作が起こる]

この vārttika をパタンジャリは次のように説明している。

「同じ動詞語根 (samānadhātu) に関して、[それが表示する〈行為〉に対する〈行為主体〉が]〈目的〉として経験されているならば、[その〈行為主体〉に関して〈目的〉に準ずる文法操作が起こる]と言われるべきである。次の事例においては [〈目的〉に準ずる文法操作は] 起こってはならない。

pacaty odanaṁ devadattaḥ (「デーヴァダッタは粥を煮ている」)

rādhyaty odanaḥ svayam eva (「粥がまさにのおのずからできている (煮えている)」)²³

この Bhāṣya に対するカイヤタの注釈は次のとおりである。

「当該 Bhāṣya の意味は次のとおりである。動詞語根が「同じ」(samāna) すなわち同一 (eka) の場合に、もし〈行為主体〉が〈目的〉としてすでに経験されているならば、その場合には [その〈行為主体〉に関して]〈目的〉に準ずる文法操作が起こる。しかしながら、相互に異なる二つの動詞語根があつて、一方の動詞語根 [が表示する〈行為〉] に対して〈目的〉であり、他方の動詞語根 [が表示する〈行為〉] に対して〈行為主体〉であるときには、[その〈行為主体〉に関して]〈目的〉に準ずる文法操作は起こってはならない」²⁴

次の文を見よ。

[25] *pacaty odanaṁ devadattaḥ* (「デーヴァダッタは粥を煮ている」)

[26] *rādhyaty odanaḥ svayam eva* (「粥がまさにのおのずからできている (煮えている)」)

[27] *pacyate odanaḥ svayam eva* (「粥がまさにのおのずから煮えている」)

²³MBh on vt. 2 ad A3.1.87 (II.13–14): karma dr̥ṣṭaś cet samānadhātāv itī vaktavyam / iha mā bhūt / pacaty odanaṁ devadattaḥ / rādhyaty odanaḥ svayam eva /

²⁴Pradīpa on MBh ad A3.1.87 (III. 165): karma dr̥ṣṭa itī / samāna ekasmin dhātāu kartā karmatvena yadi dr̥ṣṭo bhavati tadā karmavadbhāvo, yadā tv anyasmin dhātāu karmānyasmimś ca kartā tadā mā bhūt karmavadbhāva ity arthaḥ /

[26] と [27] は意味的に等価である。rādhyati の動詞語根 rādh (「成長する」) も pacyate の動詞語根 pac もともに軟化作用 (viklitti) を意味する。[26] と [27] においては粥はこれらの動詞語根が表示する軟化作用の〈行為主体〉である²⁵。意味の上からは、[26] における粥も [27] における粥も [25] においてはデーヴァダッタの軟化せしめる〈行為〉に相関した〈目的〉である。しかし、[26] における動詞語根 rādh が表示する〈行為〉に対する〈行為主体〉としての粥は、[25] においては動詞語根 pac が表示する〈行為〉に対する〈目的〉である。したがって [27] と意味的に等価な文を派生するために、[26] において動詞語根 rādh の派生に関して〈目的〉に準ずる文法操作が適用されることはない²⁶。

6.2. [25] と [27] には「同じ動詞語根」(samānadhātu) pac が使用されている。バルトリハリが問題とするのは、これらの二文における動詞語根が「同じ」であるとはどういうことかということである。この問題に関してバルトリハリは第 57 詩節と第 58 詩節でそれぞれ異なる二つの見解を提示する。

6.2.1. バルトリハリは第 57 詩節で動詞語根 pac と sidh を対比する。次の文を見よ。

[28] sidhyaty odanaḥ svayam eva (「粥がまさにお

²⁵Pradīpa on MBh ad A3.1.87 (III. 165): odanasya karmatve yādṛśī kriyā viklittilakṣaṇā tādrśy eva kartṛtve 'pi / rādhyater viklittivacanatvāt / (「粥にそれが〈目的〉であるときにある様相の軟化と特徴付けられる〈行為〉があり、それとまったく同じ様相の〔〈行為〉が] それが〈行為主体〉となったときにもある。なぜなら、動詞語根 rādh (「成長する」) は軟化作用を表示するからである)

²⁶Pradīpa on MBh ad A3.1.87 (III. 165): na cāsya vākya-dvayasya yugapatprayogaḥ / karmasthakriyātulyatvapratipādanāya tu vākyaadvayopanyāsaḥ / anyathā samānadhātāv api vyākhyātrbhiḥ katham tulyakriyatvam pradarśyate / (「[Bhāṣya の挙げる] これらの二文が〔〈行為主体〉としての自主性と〈目的〉としての従属性の矛盾から] 同時に使用されるということはない。[ここに] 二文が提示されているのは、〔〈目的〉に準ずる文法操作を受ける〈行為主体〉が] 〈目的〉に存する〈行為〉と同様のものであることを理解せしめるためである。さもなければ、[文法規則の] 説明者たちはどうして同じ動詞語根に関しても〔〈行為主体〉の] 〈行為〉の同様性を明示できよう)

rādhyati の-ti は〈行為主体〉を表示する parasmaipada 接辞であり、-ya- は A3.1.67 により〈行為主体〉を表示する sārvaadhātuka 接辞が後続するとき動詞語根に導入される接辞śyan である。

のずからできている (煮えている))

この [28] における sidhyati の動詞語根 sidh (「成就する」) と [26] における rādhyati の動詞語根 rādh は同義である²⁷。ともに〈行為主体〉である粥に存する軟化作用を意味する。[26] と [28] は意味的に等価である。

さてここで [25] の意味に関するパタンジャリの次の言明に注目しよう。

[「反論」この世界では、odanam pacati (「彼は粥を煮ている」) という [文が使用される]。もし粥が煮られるとすると別のものが実現されることになろう。

[答論] このような誤謬はない。x は y を目的としているという関係 (tādarthya) に基づいて、y を表示する語によって x が表示される (tācchabdyā) であろう。粥を目的とする米が「粥」(odana) という語によって表示される。

[問] しかしこの世界での [正しい文の使用は] どうあるべきなのか。taṇḍulān odanaṃ pacati (「彼は米を煮て粥を作っている」) という文が使用されるべきなのか、それとも taṇḍulānām odanaṃ pacati (「彼は米から粥を作っている」) という文が使用されるべきなのか。

[答] いずれも使用されるべきである。

[問] どうしてか。

[答] 実にこの世界では taṇḍulān odanaṃ pacati という文においては、動詞語根 pac は二つの意味を有する (dvyyarthaḥ paciḥ)。[この文は] taṇḍulān pacann odanaṃ nirvartayati (「彼は米を煮て粥を実現している」) という [文と意味的に等価である]。

さて次の事例 taṇḍulānām odanaṃ pacati においても動詞語根 pac はまさに二つの意味を有する。[taṇḍulānām の] 第六格接辞は変容関係 (vikārayoga) を表示する。この文は taṇḍulavikāram odanaṃ pacati (「彼は米の変容態である粥を実現している」) という [文と意味的に等価である]」²⁸

²⁷SK, divādi, DhP 1180: rādhyaty odanaḥ / sidhyatīty arthaḥ /

²⁸MBh on A1.4.49 (I.332.14–19): ihocyata odanaṃ pacatīti / yady odanaḥ pacyeta dravyāntaram abhinirvarteta / naiśa doṣaḥ / tādarthyāt tācchabdyāṃ bhaviṣyati / odanārthās taṇḍulā odana itī / atheha katham bhavitavyam / taṇḍulān odanaṃ pacatīti / āhosvit taṇḍulānām odanaṃ pacatīti / ubhayathāpi bhavitavyam / katham / iha hi taṇḍulān odanaṃ

まずもって [25] は世間においても学術の分野においても確立された語法である。そして *odanam pacati* (「粥を煮ている」) は *taṇḍulān pacati* (「米を煮ている」) に意味的に等価である²⁹。

[25] において動詞語根 *pac* は二つの意味をもつ。このことはカイヤタによれば、動詞語根 *pac* が軟化作用を従属要素とする実現作用を表示するということであり、軟化が実現した米という米の特殊な変容態が粥に他ならないならば、それはつまり動詞語根 *pac* は軟化をもたらず軟化せしめる〈行為〉(vikledana) を表示するということである³⁰。

以上から明らかなように、[25] における動詞語根 *pac* が表示するものと [27] における動詞語根 *pac* が表示するものとは異なる。それは [25] における動詞語根 *pac* が表示するものと [26][28] における動詞語根 *rādh*、*sidh* が表示するものとが異なるのと同様である。

意味の違い (arthabheda) が言葉の違い (śabdabheda) の因であるという前提に立つ VP3.7.57 の見解では、表示する意味の違いによって [25] における動詞語根 *pac* と [27] における動詞語根 *pac* は異なる別個の動詞語根とみなされる。しかしながら、語形の同形性 (tulyarūpatva) によって「同一の動詞語根」(eka) と構想される (ekativaparikalpanā)。この見解では *vārttika* の「同じ動詞語根」は、主要なる〈行為主体〉の

pacatīti dvyarthaḥ pacīḥ / taṇḍulān pacann odanam nirvartayatīti / ihedānīm taṇḍulānām odanam pacatīti dvyarthaś caiva pacir vikārayoge ca śaṣṭhī / taṇḍulavikāram odanam nirvartayatīti / 米と粥の変容関係については、小川 [2007: fn.46] を見よ。

²⁹語の転義的使用 (upacāra) である。一般的には転義用法には四根拠がある。MBh on A4.1.48 (II.218.14–15): *kathaṃ punar atasmin sa iti etad bhavati / caturbhiḥ prakāir atasmin sa iti etatd bhavati tātsthyāt tāddharmyāt tatsāmīpyāt tatsāhacaryād iti /* (「[問] しかしどうして *x* ならざるものに関して *x* というこの語が起こるのか。[答] 四様に *x* ならざるものに関して *x* というこの語が起こる。 *x* に在るとの関係 (tātsthya)、*x* の属性であるという関係 (tāddharmya)、*x* に近接しているという関係 (tatsāmīpy)、*x* に同伴しているという関係 (tatsāhacarya) に基づいて」) ここにおける *x* を目的とする関係 (tādarthya) もまたこれらの関係に加えられるべき転義用法の根拠である。

³⁰Pradīpa on MBh ad A1.4.49 (II.408): *dvyarthaḥ pacir iti / vikledanopasarjane nirvartane pacir vartate / taṇḍulān vikledayann odanam nirvartayatīti arthaḥ /*

〈行為〉を表示するために起こる動詞語根と〈目的・行為主体〉の〈行為〉を表示するために起こる動詞語根という二つの異なる動詞語根が語形の同形性によって「同じ」と錯認されることで措定されるものである。

6.2.2. 言葉はそれが理解せしめるものとして語形と意味の二者を有する。意味のアスペクトを考慮することなく、語形のアスペクトだけから言葉の同一性を措定することができる。言葉 *x* と *y* があるとき、それぞれが表示する意味は異なっても、語形が同一であれば、*x* と *y* は同一の語である。この見解はバルトリハリによって *Vṛtti* に次のように述べられている。

「個々の文において他の語から区分されるものであっても意味の違いが知られるものであっても、語形が同じである限り、*go* (「牛」) *akṣa* (「眼」) といったこれらすべての語、それは一つの語である」³¹

go も *akṣa* も多義語である。*go* は牛、牛製品、星等を意味し、*akṣa* は車軸、眼、さいころ等を意味する。バルトリハリはここでは同一の語が複数の意味を表示するという見解を提示しているのである。この見解では、単一の語が複数の対象表示能力 (abhidhānaśakti) の基体であることがその語の対象表示の本性 (svabhāva) から定まっていると考えられる。

すでに述べたように、動詞語根 *pac* は、[25] においては粥が軟化するのを促進する〈行為〉すなわち軟化作用に限定された実現〈行為〉を表示し、[27] においては軟化作用を表示する。VP3.7.58 の見解では、同一の動詞語根 *pac* が軟化作用と実現〈行為〉の集合とその集合の一部である軟化作用の両者を表示する。なぜならこの見解では、動詞語根 *pac* は、その表示本性により、軟化作用と実現〈行為〉の集合を表示する能力とその集合の一部である軟化作用を表示する能力の二つの能力を有しているからである。

6.3. [25] の動詞語根 *pac* は軟化作用を従属要素とする実現〈行為〉を表示する。ここで次の

³¹*Vṛtti* on VP1.72: *vākyeṣu ca praviveki nirjñātārthabhedaṃ vā yāvat tulyarūpaṃ padaṃ gaur akṣa iti sarvaṃ tad ekam //*

Bhāṣya に注目したい。

「[問] これらの事例 [*pacati* (「煮ている」)、*pācayati* (煮させている)] において、動詞語根 *pac* の主要な意味とは何か。

[答] それはかの米の軟化作用である」³²

このパタンジャリの言明に基づいてバルトリハリは「〈行為〉詳解」章で次の詩節を述べている。

VP3.8.15: *anantaram phalam yasyāḥ kalpate tām kriyām viduḥ / pradhānabhūtām tādarthiyād anyāsām tu tadā-khyatā //*

「その直後に結果が実現するものを [文法家達は] 主要なる〈行為〉とみなす。一方、[先行する] 他の [〈行為〉] は、*x* は *y* を目的とするという関係 (*tādarthya*) に基づいて、その [〈行為〉という] 呼称を得る」

パタンジャリが「軟化作用」(*viklitti*) という語によって意図しているものは、その直後に結果を生み出す〈ハタラキ〉である。〈行為主体〉の〈行為〉は、その軟化作用を目的としているものとして、動詞語根 *pac* の表示対象となる。米あるいは粥の軟化作用は、意味のレベル (*sābdena rūpeṇa*) では従属要素であっても、現実のもののレベル (*ārthena rūpeṇa*) では主要素である。

VP3.7.55–58 注釈和訳研究

*ヘーラーラージャの注釈 *Prakāśa* には部分的に欠落があり、プッララージャがその欠落を埋める形で補作している。VP3.7.55–58 に対する *Prakāśa* には幸運なことに欠落はない。定本としたのは Iyer [1963] である。

VP3.7.55

[VP7.55.0] *evaṃ tarhi kartā bhūtvā karma bhavati ti karma bhūtvā kartā katham bhavati yena karmakartṛvasambhava ity āha—*

[反論] もしそうなら、その場合 [当該の *kāraka* は] 〈行為主体〉となつてから〈目的〉となるから、〈目的〉となつてから〈行為主体〉となることがどうしてあり得よう。もしあり得るとするならば、〈目的・行為主体〉 (*karmakartṛ*) の文法操作が可能となる。

[答] この反論に対して [バルトリハリは] 次のように述べる。

VP3.7.55: *tadvyāpāraviveke 'pi svavyāpāre vyavasthitam /*

karmāpadiṣṭāṃ labhate kvacic chāstrāśrayān vidhīn //

「ある [動詞語根の] 場合には、[〈目的〉は] その [〈行為主体〉の] 〈ハタラキ〉がない場合にも自己の〈ハタラキ〉に対して [自主的なものとして] 存立する。[そのような〈目的〉は] 文法規則に依拠して、〈目的〉を根拠として教示されている文法操作を獲得する」

[VP3.7.55.1] *bhidyate kusūla ityādaḥ yadā kartṛpraiśasya nirvṛtīḥ kusūlāder viśārārurūpatayā svayam eva bhidānubhavāt, lūyate kedāra ityādāv api śuśkataratvāt kartṛprayatnānapekṣāṇāt, pacyate odanaḥ svayam evetyādāv³³ api saukaryātiśayavaśāt kartur anapekṣāṇāt tadā svavyāpāre svātantryāśraye kartṛtve śāstreṇa yatnena karmakāryaprāptyarthaḥ karmavadbhāvo vidhīyata iti karmaṇi apadiṣṭān vihitān vidhīn kāryāṇi kartāpi san prāpnoti /*

bhidyate kusūlaḥ (「穀物瓶が壊れる」) 等においては、穀物瓶等が崩壊してまさにおのずから壊れることが経験されるから、*lūyate kedāraḥ* (「田圃が [まさにおのずから] 刈り取られる」) 等においても [田圃が] よく乾いているので〈行為主体〉の [稲の刈取りの] 努力を期待しないから、*pacyate odanaḥ svayam eva* (「粥がまさにおのずから煮える」) 等において

³²MBh on A3.1.26 (II.32.24–25): *iha paceḥ pradhānārthaḥ / yāsau taṇḍulānām viklittīḥ /*

³³Iyer: *etevetyādāv*. 誤植

も、〔〈行為〉実現の〕卓越した容易さの故に〈行為主体〉〔の努力〕を期待しないから、〈行為主体〉の〈促進〉(praīṣa)がないとき、〔穀物瓶等は〕「自己の〈ハタラキ〉に対する」自主性に依拠して〈行為主体〉となる。

この場合、文法学は学的努力として〈目的〉に依拠する文法操作を獲得するために、〈目的〉に準ずる文法操作を規定しているから、「〈目的〉を根拠として」(karmaṇi)「教示されている」(apadiṣṭa)すなわち規定されている(vihita)「操作」(vidhi)すなわち文法操作(kārya)を〈行為主体〉であっても獲得する。

[VP3.7.55.2] karmakartrantaravyāpārapātanena³⁴ hi svavyāpāre kartṛtvāt karmakāryāṇi na syur iti śāstrārambhah /

実に、〔第一次的な〈行為主体〉とは〕異なる〈目的〉にほかならない〈行為主体〉の〈ハタラキ〉に目を向けることによって、〔〈目的〉が〕自己の〈ハタラキ〉に対して〈行為主体〉であることから〔〈行為主体〉としての〈目的〉に〕〈目的〉に依拠する文法操作は起こらないであろうと考えて〔〈目的〉・〈行為主体〉に関する〕文法規則が定式化されている。

[VP3.7.55.3] kvacid iti / karmasthabhāvānām karmasthakriyānām ca dhātūnām viṣaya ity arthaḥ //55//

「ある〔動詞語根の〕場合には」(kvacit)：その表示するbhāva(静的行為)が〈目的〉に存する動詞語根、それが表示するkriyā(動的行為)が〈目的〉に存する動詞語根の領域においては、という意味である。

VP3.7.56

[VP3.7.56.0] nanu ca kartṛpraīṣe nivṛtte tadāyattaṃ karmatvam atra mā bhūt kartṛtvaṃ tu kathaṃ yena karmakarteti vyapadeśaḥ / tathā hi / sati pradhāna-kartari karmaṇaḥ svakriyāyām vyāpāro dr̥ṣṭa iti tadabhāve karmatvavat kartṛtvam api kuta ity āśaṅkyāha /

〔反論〕〈行為主体〉の〈促進〉が存在しないとき、その〔〈促進〉〕に依存する〈目的〉性はこの場合確かにあってはならないとしてもどうして〈行為主体〉性があり得よう。もしあれば〔当該のkārakaは〕「〈目的〉・〈行為主体〉」(karmakartṛ)と呼び得ようが。すなわち、主要なる〈行為主体〉が存在するときに〈目的〉に自身の〈行為〉〔の実現〕に対する〈ハタラキ〉が見られるから、その〔主要なる〈行

為主体〉が〕存在しないとき、〈目的〉性と同様〈行為主体〉性もどうして成立しよう。

〔答論〕このような懸念に対して〔バルトリハリは次のように〕述べる。

VP3.7.56: nivṛttapreṣaṇaṃ karma svakriyāvayave sthitam /
nivartamāne karmatve sve kartṛtve 'vatiṣṭhate //

「〈行為主体〉の〕〈促進〉がない(nivṛttapreṣaṇa)、自己に存する部分的〈行為〉に立脚する〈目的〉は、〈目的〉性がなくなったときには自己の〈行為主体〉性に存立する」

[VP3.7.56.1] dhātvarthānukūlyena ceṣṭanaṃ kartuḥ preṣaṇaṃ svavyāpāraḥ kārakāntaraviniyogalakṣaṇam /

動詞語根の意味〔である〈行為〉の実現に〕資するものとしての〈行為主体〉の振舞・活動(ceṣṭana)が〈行為主体〉自身の〈ハタラキ〉としての〈促進〉(preṣaṇa)であり、その〈促進〉は他のkārakaを任用する作用(kārakāntaraviniyoga)と特徴づけられる。

[VP3.7.56.2] tad anabhidhīyamāne kartari pacyate odanaḥ svayam evetyādaḥ nivartate / kartrāśrayasya vyāpārasya kartari prayatnenābhidhīyamāne dhātunā-nabhidhīyamānatvāt / pratīyamānatvaṃ tu tasya dvyarthaḥ pacir iti bhāṣyavirodhād asaṅgatam ity ākhyātam / tāni dhātvarāṇi iti ca vakṣyamānatvād viṣayavibhāgena dhātvarthatā kartṛvyāpārasya granthakṛto 'bhipretā /

その〔主要なる〈行為主体〉による〈促進〉〕は、〔主要なる〕〈行為主体〉が表示されない場合、すなわちpacyate odanaḥ svayam eva(「粥がまさにおのずから煮える」)等においては存在しない。なぜなら、〔主要なる〕〈行為主体〉に依拠する〈ハタラキ〉は、〔その〕〈行為主体〉が努めて表示されない場合には動詞語根によっては表示されない(anabhidhīyamāna)からである。しかしその〔〈行為主体〉の〈ハタラキ〉〕は〔それらの表現において動詞語根から〕理解される(pratīyamāna)と言え、それは「動詞語根pacは二つの意味を有する」(dvyarthaḥ pacih)というBhāṣyaの言明と矛盾するから不整合であると宣明される³⁵。

そして〔直後の詩節VP3.7.57で〕「それらをまさに異なる動詞語根とみなす」(tāni dhātvarāṇi)と述べられるから、著作者〔バルトリハリ〕は、〔主要なる〕〈行為主体〉の〈ハタラキ〉が動詞語根の

³⁴R: kartrantaravyāpārapātanena.

³⁵MBh on A1.4.49. 本論 6.2.1 を見よ。

意味となるということを領域を区分することによって認めている。

[VP3.7.56.3] tasmin nirvṛte svasmin kriyāvayave pradhānakriyāpekṣayā guṇabhūte svavyāpāre karma sthitam kartṛtāyā / bhūtapūrvagatyā tv asya karma-vyapadeśaḥ /

その〔〈行為主体〉による〕〈促進〉がないとき、「自己に属する」〔動詞語根が意味し得る〈行為〉の総体の〕「部分的〈行為〉」(kriyāvayava)、すなわち主要〈行為〉に相関して従属要素である〔〈目的〉]自身の〈ハタラキ〉に対して〈目的〉は〈行為主体〉として存立する。しかし、この〔〈目的〉]が「〈目的〉」と呼称されるのは過去状態の理解 (bhūtapūrvagati) に基づいてである³⁶。

[VP3.7.56.4] yady api ca kartṛvyāpāre vivakṣite svakriyāyām evāvasthānaṁ tadvāreṇa pradhānakriyā-nirvartanāt, kāraḥ karmeti sāmānādhikaraṇyāc ca, tathāpi sāmāthyād atra prādhānyenāvasthānaṁ boddhavyam /

〔主要なる〕〈行為主体〉の〈ハタラキ〉が表現しようとして意図される場合、確かに〔〈目的〉]はまさに自己の〈行為〉に存立する。なぜなら、〔〈目的〉]はその〔〈目的〉自身の〈行為〉]を通じてのみ主要〈行為〉を実現するからであり、さらに「〈目的〉は〈行為参与者〉(kāraḥ)である」(kāraḥ karma) という〔「〈目的〉」(karman) と「〈行為参与者〉(kāraḥ)」の両語の間に] 同一対象指示の関係があるからである³⁷。しかしながら、言明効力からこの〔〈目的・行為主体〉表現の] 場合には〔〈目的〉]は主要なるものとして存立すると理解されるべきである。

[VP3.7.56.5] ata eva kartṛvyāpārāpekṣasya karmatvasya nirvṛtāv ātmīye sarvatra bhavati³⁸ svakriyāviṣaye kartṛtve vatiṣṭhate iti kartṛvyāpārāpekṣayā pūrvaṁ karma bhūtvā saukaryātiśayapratipādanaparatayā tadavivakṣāyām kartā sampadyata iti bhavati karmakartā /

まさにこの故に、〈行為主体〉の〈ハタラキ〉を期待する〈目的〉性がない場合、〔その kāraḥ は〈行為主体〉の〈ハタラキ〉を期待した〈目的〉ではな

³⁶PIŚ 76: smṛatikābhāve bhūtapūrvagatiḥ 「[ある語が表示するものが] 現在存在しないとき、その語は以前その語が表示するものとして存在していたものを表示すると理解される」

³⁷VP3.7.18–21. 小川 [2000] を見よ。

³⁸R: sarvatra bhavati を欠く。

いから、] 自己に属する、すべて [の kāraḥ] に存在する自己の〈行為〉に関する〈行為主体〉性に在定する。したがって、〈行為主体〉の〈ハタラキ〉を期待することによって先ず〈目的〉となり、次に〔〈行為〉の] 卓越した実現容易性を理解させることを意図してその〔〈行為主体〉の〈ハタラキ〉]を表現しようとして意図しないときに〈行為主体〉となるから、〈目的・行為主体〉というあり方は成立する。

[VP3.7.56.6] ayaṁ bhāvaḥ / na kevalaṁ kartṛvyāpārasyāvivakṣāmātre karmakartṛtā, api tu svavyāpāre svātantryavivakṣāyām api satyām / tatas cāprāptāni yagādīni karmakāryāṇi karmavat karmaṇā tulyakriyāḥ (A3.1.87) iti śāstreṇa prāpyante /

〔本詩節でバルトリハリが〕意図しているのは次のような考えである。ただ単に〔主要なる〕〈行為主体〉の〈ハタラキ〉が表現しようとは意図されない場合だけではなく、〔〈目的〉]が自己の〈ハタラキ〉に対して自主的なものとして表現しようとして意図される場合にも〈目的・行為主体〉のあり方が成立する。そしてそれゆえ、〔〈行為主体〉に依拠しては] 文法的に結果しない yak 接辞導入等の〈目的〉に依拠する文法操作を A3.1.87 karmavat karmaṇā tulyakriyāḥ という文法規則が結果せしめる³⁹。

[VP3.7.56.7] tad uktaṁ vārttikakṛtā—

karmakartari kartṛtvaṁ svātantryasya vivakṣitvāt (Vt. 5 on A3.1.87) iti /

そのことを Vārttika の作者 [カーティアヤナ] は次のように述べている。

「〈目的・行為主体〉には〈行為主体〉性がある。自主性が表現しようとして意図されるから」

[VP3.7.56.8] parāyattopajane 'pi bhīdādu kusūlādeḥ parānapekṣā pratipādītā bhāṣe—

yas tu khalu nivāte nirabhivarṣe acirakālakṛtāḥ kusūlāḥ svayam eva bhīdyata

iti / nivāta iti samīrasampātam anavāpyeti kartṛvyāpāro vyudastāḥ / nirabhivarṣa iti salilakālāsamsparśo vyudastāḥ / acirakṛta iti kālānta[ra]pari-

³⁹ヘーラーラージャは、主要なる〈行為主体〉の〈ハタラキ〉が表現しようとは意図されない場合には pacyate odanena (「粥が煮える」) といった表現が成立し、一方、〈目的〉が〈目的〉自身の〈行為〉に対して自主的なものとして意図される場合には pacyate odanaḥ svayam eva (「粥がまさにおのずから煮える」) といった表現が成立すると考えている。本論 2 を見よ。

vāsadhīyamānaviśeṣavyudāsaḥ⁴⁰ / ete hi pātahetavaḥ
kusūlasya sambhāvyeran iti vyudastāḥ / evaṃ cādṛḍha-
samniveśitvāt svayam eva viśīryata iti kartṛvopa-
pattih /

動詞語根 *bhid* 等が表示する破壊〈行為〉等は〔一般的には〕他者に依存して生起するとしても、穀物瓶等が他者に依存することなく〔壊れる場合があることが〕*Bhāṣya* において次のように説明されている。

「しかし実に、風もなく (*nivāta*)、雨もあたら
ない (*nirabhivarṣa*) 場所にあり作られて間もない
(*acirakālakṛta*) 穀物瓶がまさにおのずから壊れる
(*kusūlaḥ svayam eva bhidyate*)」⁴¹

「風もなく」という表現によって、風の衝突を得ることなくというように〔風という〕〈行為主体〉の〈ハタラキ〉が排除される。「雨もあたら
ない」という表現によって、少量の〔雨〕水との接触が排除される。「作られて間もない」という表現によって、一定期間の持続的存在によって付与される〔経年劣化といった〕特性が排除される。実にこれら〔風や雨や経年劣化〕は穀物瓶の倒壊因であり得るであろうから排除される。そしてこのような場合、〔穀物瓶が〕強固な構造を有するものではないならば、そのことによって〔穀物瓶は〕まさにおのずから崩壊するから〔そのような穀物瓶には〕〈行為主体〉性が妥当する。

[VP3.7.56.9] *yatrāpi dātrahasto devadattaḥ paripatan
dṛśyate lūyate kedāraḥ svayam eveti / atrāpi tīvrakara-
kīraṇasamparkasamutsāritasnehaḥ parijarjaritanālaḥ
viśīryamāṇaḥ kedāraḥ tāsthyāt vīrhirūpo lavane
sukaratām eti /*

デーヴァダッタが鎌を手にして〔田圃の至る所を〕飛び回っているのが見られる場合にも、*lūyate kedāraḥ svayam eva* (「田圃がまさにおのずから刈り取られる」) という〔表現が成立する〕。この場合にも、熱をもたらず光線に晒されることから水分がなくなり⁴²、茎は萎え青々さを失った「田圃」— 所在関係 (*tāsthya*) からそれは稲に他ならない— は⁴³、刈り取りに関する容易性を得ている。

⁴⁰R: *kālāntaraparivāsadhīyamānaviśeṣavyudāsaḥ*.

⁴¹MBh on A3.1.87. 本論 2 を見よ。

⁴²R: *tīvratarakīraṇasamparkasamutsāritasnehaḥ*. *Raghu-*
natha は「非常に暑い光線」(*tīvratarakīraṇa*) という読みを提案している。

⁴³所在関係は転義的表現 (*upacāra*) の一つの根拠であり、「田圃」(*kedāra*) は転義的にそこに植えられている稲を意味するということが意図されている。fn. 28 を見よ。

[VP3.7.56.10] *sāmagrīsādhyatvāc ca kriyāṇaṃ
pratyekaṃ vyāpārotkarṣaṇārthaṃ svātantryādhyā-
ropeṇāpy upapannaḥ prayogaḥ devadattaḥ chinatti,
asiḥ chinatti, sthālī pacatīyādih / tatra ca karmaṇa
eva kartuḥ karmavadbhāvo nānyasya, chidyate rajjuḥ,
pacyate odanaḥ svayam eveti /*

そして、〈行為〉というものは〔*kāraka* の〕集合によって実現されるべきものであるから、〔参与している *kāraka*〕それぞれの〈ハタラキ〉を引き立てる (*utkarṣaṇa*) ために〔それぞれに〕自主性を仮構することによっても以下のような表現が成立する。

devadattaḥ chinatti (「デーヴァダッタが切っている」)

asiḥ chinatti (「刀が切っている」)

sthālī pacati (「鍋が煮ている」)

そしてその場合、〈目的〉に準ずる文法操作 (*karmavadbhāva*) は、〔以下のように〕〈目的〉である〈行為主体〉だけに成立して、他〔の *kāraka* である〈行為主体〉〕には成立しない。

chidyate rajjuḥ [svayam eva] (「縄が〔まさにおのずから〕切れる」)

pacyate odanaḥ svayam eva (「粥がまさにおのずから煮える」)

[VP3.7.56.11] *tad etad uktaṃ bhāṣye—*

*tatrāpi yāsau sukaratā nāma tasyā nānyaḥ kartā
(MBh on A3.1.87)*

*iti / saukaryātiśayavadvyāpāre kedāre samīhite na
devadattaś chedasya kartṛvyapadeśaṃ pratipattum yo-
gyo 'pi tu kedāra evety arthaḥ /*

そのことは *Bhāṣya* に次のように言われている。

「その場合も、その実現容易性 (*sukaratā*) と呼ばれるもの、それ〔を持つ〈行為〉〕には他に〈行為主体〉はない」

〔稲刈りの〈行為〉に関してその〕卓越した実現容易性を有する〈ハタラキ〉があるものとして田圃が意図される場合、〔稲の〕切断に対して「〈行為主体〉」という呼称を得ることができるのはデーヴァダッタではなくて田圃だけであるという意味である。

[VP3.7.56.12] *odanaviklittau tu chedanavat kartṛ-
vyāpāro 'pi nāvaśyam apekṣyaḥ / anapekṣitakarṭṛ-
prayatnā eva hi taṇḍulā viklidyanti / karaṇādi-*

kāraviniyoga eva hy atra mukhyaḥ kartrvyāpāro
lakṣyate //56//

一方、粥の軟化の場合には、切断の場合とは違って、〈行為主体〉の〈ハタラキ〉でさえそれを期待する必要は必ずしもない。なぜなら、まさに〈行為主体〉の努力を期待することなく米は軟化するからである。実にこの場合に観察されるのは、〈手段〉等の *kāraka* の任用こそが〈行為主体〉の主要な〈ハタラキ〉であるということである⁴⁴。

VP3.7.57

[VP3.7.57.0] nanu caika eva pacyādīdhātuḥ kvacit
kartrvyāpāre guṇabhūtam artham āha pacaty odanaṃ
bhinnati kusūlaṃ lunāti kedāraṃ devadatta iti / kvacit
tu kartrvyāpāre 'pratipannaguṇabhāvaṃ svapratīṣṭham
artham āha pacyata odanaḥ svayam evetyādāv ity eṣo
'sati rūpabhede dhātūnām viveko durlabha iti kartr-
pratyayavācyaiva bhāvanā bhavati ity āśaṅkyāha—

[反論] まさに同一の *pac* 等の動詞語根が、ある場合には以下のように〈行為主体〉の〈ハタラキ〉に従属する意味を表示する。

pacaty odanaṃ devadattaḥ (「デーヴァダッタは粥を煮ている」)

bhinnati kusūlaṃ devadattaḥ (「デーヴァダッタは穀物瓶を割っている」)

lunāti kedāraṃ devadattaḥ (「デーヴァダッタは田圃を刈り取っている」)

またある場合には以下のように〈行為主体〉の〈ハタラキ〉に対する従属性が理解されない自足した (*svapratīṣṭha*) 意味を表示する。

pacyata odanaḥ svayam eva (「粥がまさにおのずから煮える」)

このような区分は動詞語根に語形上の違いがない限り得難いから、[〈行為主体〉の〈ハタラキ〉である] 生成作用 (*bhāvanā*) は、〈行為主体〉を表示する接辞 [すなわち *pacati* 等の *-ti*] だけの表示対象であるべきである⁴⁵。

⁴⁴粥を煮るべく薪や鍋等を準備し、実際に煮る〈行為〉にデーヴァダッタが従事しているとき、一定の状況になれば、デーヴァダッタが何らその〈行為〉に参加しなくても、粥は自動的に煮える。

⁴⁵*anvaya-vyatireka* に基づく言語項目への意味配当の原理では、意味の差異は言語項目の差異に基づく。*paca-ti* からは軟化作用とそれを実現する生成作用が理解され、*pacya-te* からは軟化作用だけが理解されるとき、*pac* 以外の言語項目に生成作用という意味が配当され得る。

[答論] このような疑念に対して [バルトリハリは] 次のように述べる。

VP3.7.57: tāni dhātvantarāṅy eva pacisidhyativad
viduḥ /

bhede 'pi tulyarūpatvād ekatvaparikalpanā //

「ある文法家達は *pac* (「煮る」) と *sidh* (「煮える」) のように、それらをまさに異なる動詞語根とみなす。異なる [動詞語根] であるとしても、語形の同形性から同一であると構想される」

[VP3.7.57.1] karmakartrviṣayāṇi pacyādīni viklittya-
dimātravacanāni tadupasarjanavikledanādivyāpāra-
vācipacyādīdhātubhyo dhātvantarāṇi bodbhavyāni /
arthabhedenā śabdabheda / pradhānaṃ hi śabdānām
pratipādyo 'rthaḥ / pradhānānuyāyī ca guṇa iti
nyāyāt pratyartham bhidyate śabdaḥ / tadyathā pacer
vikledanavacanāt sidhyatir anyo dhātur viklitti-
vacanaḥ /

〈目的・行為主体〉の領域に起こる *pac* 等 [の動詞語根] は、軟化作用 (*viklitti*) 等の [〈ハタラキ〉] だけを表示するから、[〈行為主体〉の領域に起こる] その [作用を] 従属要素とする軟化をもたらす作用 (*vikledana*) といった〈ハタラキ〉を表示する *pac* 等の動詞語根とは別の動詞語根であると理解しなければならない。なぜなら、意味の違い (*arthabheda*) に応じて言葉も異なる (*śabdabheda*) からである。実に、言葉にとって主要なるものとはそれらによって理解せしめられるべき意味である。そして「従属要素は主要素に従う」という道理から、意味ごとに言葉は区分される。例えば、軟化作用を表示する *sidh* (「煮えている」) は軟化をもたらす [〈ハタラキ〉] を] 表示する動詞語根 *pac* とは異なる動詞語根である。

[VP3.7.57.2] dhātvantaratve 'pi caikatvena rūpā-
bheda upadeśo dhātupāthe ḍupacaṣ pāka ityadi /
abhinnarūpaṃ hy ekatvakalpanāsahaṃ vastu /

そして異なる動詞語根であるとしても、語形の不異性から同一なものとして *dhātupāthe* に *ḍupacāṣ pāke* (「*ḍupacāṣ* は料理行為の意味で起こる」)⁴⁶ 等の形で教示されている⁴⁷。実に形が不異なるとき、ものは同一なものとしての構想を許す。

[VP3.7.57.3] yatra tūpadeśabhede phalabhedo 'sti
tatra dvistrirupadeśaḥ, tadyathā kṣiyatyādīnām

⁴⁶DhP I.1045.

⁴⁷DhP IV.83: *ṣidhú(-ū)* samrāddhau 「*ṣidhú(-ū)* は成就の意味で起こる」

vikaraṇabhedāt kṣi kṣaye bhvādu,⁴⁸ kṣi nivāsa-gatyor iti tudādu divādu ca, kṣiṣ hiṃsāyām iti ca kryādu //57//

しかし、教示 (upadeśa) の違いを根拠に [文法操作の] 結果に違いがある場合には、教示が二度三度と繰り返される。例えば、動詞語根 *kṣi* 等は、vikaraṇa 接辞の違いに基づいて次のように教示されている⁴⁹。

bhū 群の動詞語根のリスト中: *kṣi kṣaye* (「*kṣi* は衰滅の意味で起こる」)⁵⁰

tud 群の動詞語根のリスト中及び *div* 群の動詞語根のリスト中: *kṣi nivāsa-gatyoh* (「*kṣi* は住と進行の意味で起こる」)⁵¹

*kri*群の動詞語根のリスト中: *kṣiṣ hiṃsāyām* (「*kṣiṣ* は殺生の意味で起こる」)⁵²

VP3.7.58

[VP3.7.58.0] idānīm

ekam āhur anekārthaṃ śabdān anye parikṣakāḥ (VP2.250ab)⁵³

iti nayanāha—

「他の理論家達は、単一の言葉が複数の意味を表示すると主張する」

次にこの見解に従って [バルトリハリは] 述べる。

⁴⁸誤植 *bhvavādu* を訂正。

⁴⁹パーニニ文法家は、接辞を条件として動詞語根の後に導入される接辞を *vikaraṇa* と呼ぶ。ここでは、*bhū* 群の動詞語根 (第1種) の場合の A3.1.68 による *śap*、*div* 群の動詞語根 (第4種) の場合の A3.1.69 による *śyan*、*tud* 群の動詞語根 (第6種) の場合の A3.1.77 による *śa*、*su* 群の動詞語根 (第5種) の場合の A3.1.73 による *śnu*、*kri*群の動詞語根 (第9種) の場合の A3.1.81 による *śnā* 等の接辞が *vikaraṇa* と呼ばれるものである。なお、A3.1.67 による *yak* もまた *vikaraṇa* である。

⁵⁰DhP 1.255.

⁵¹DhP VI.144. 伝承されている *dhātupāṭha* 中の *div* 群の動詞語根のリスト中には、ヘーラーラージャが挙げる項目の記載はない。ヘーラーラージャは、*bhū* 群の動詞語根のリスト中の *kṣi* の受動形 (*kṣīyate*) と混同している可能性がある。

⁵²DhP IX.35. *su* 群の動詞語根のリスト中に以下の記載があることに留意しなければならない。DhP V.30: *kṣi hiṃsāyām* (「*kṣi* は殺生の意味で起こる」)

⁵³VP2.250: *ekam āhur anekārthaṃ śabdān anye parikṣakāḥ / nimittabhedād ekasya sāvārthyam tasya bhidyate //* (赤松 [1998b: 85 「別の思想家たちは次のように言う。多くの意味をもつ語は、同じ一つの語である。要因の違いに基づいて、その同じ一つの語の全意味表示能力 (その語に関わる限りのすべての意味を表示する能力) が分割されるのである」)

VP3.7.58: *ekadeśe samūhe ca vyāpārāṇaṃ pacādayaḥ /*

svabhāvataḥ pravartante tulyarūpasamanvitāḥ //

「*pac* 等 [の動詞語根] は、同じ語形を具えている限り [単一なるものであり、対象表示の] 本性 (*svabhāva*) に基づいて、一部の〈ハタラキ〉と〈ハタラキ〉の集合の両者を表示する」⁵⁴

[VP3.7.58.1] *tulyenābhinnena rūpeṇa svabhāvena yuktā ete dhātavo 'bhinnāḥ, abādhyamānasyaikākārapratyayasāyābhedāvedakatvāt /*

「同じ」(*tulya*) すなわち異なるない (*abhinna*) 「相」(*rūpa*) すなわち本質 (*svabhāva*) を有するからこれらの動詞語根は不異なるものである。なぜなら、同一の形象を有する知は拒斥されない限り不異性を知らしめるものであるからである⁵⁵。

[VP3.7.58.2] *anekārthatvam eva bādhakam iti cen na / śaktibhedena tadupapatteḥ / anekārthapratipādanaśaktir hy eko 'pi śabdo drṣṭaḥ / yathā grāmaśabdāḥ śālāsamudāyavāṭakaparikṣiptadeśajana-samudāyavacanāḥ / yathā vākṣādiśabdāḥ /*

[反論] まさに意味の複数性 (*anekārthatva*) が [同一の形象を有する知を] 拒斥する。

[答論] 否である。なぜなら [表示] 能力の違い (*śaktibheda*) によってその [意味の複数性] を説明することができるからである。実に、単一の言葉であってもそれに複数の意味伝達能力 (*arthapratipādanaśakti*) があることが経験上知られている。例えば、*grāma* という語は、集落 (*śālāsamudāya*)、柵によって囲まれた場所 (*vāṭakaparikṣiptadeśa*)、共同体 (*janasamudāya*)

⁵⁴本詩節とパラレルなものとして以下の詩節をあげることができる。VP3.14.265: *anekadharmavacanāḥ śabdāḥ saṅghābhidhāyinaḥ / ekadeśeṣu vartante tulyarūpāḥ svabhāvataḥ //* (「複数の属性を表示する集合を表示する語は、同一の語形をもつ限り一つの語として、[対象表示の] 本性に基づいて、その集合の一部を表示する」) 語 *x* が全体を表示し、語 *y* が部分を表示するとして、*x* と *y* の語形が同一であるならば、同一の語が全体と部分の両者を表示するとみなされる。

⁵⁵ヘーラーラージャは、詩節中の *tulyarūpasamanvita* の *rūpa* を語形ではなく本質を意味するものと解釈し、その本質を二つの動詞語根に関する同一性判断の根拠と考えている。次のバルトリハリは主張に依拠した解釈である。Vṛtti on VP1.71: *kāryatve tu sakṛdūccaritasya varṇasya padasya vā punaruccāraṇe sa evāyam ity avyabhicāripratyayābheda utpadyamāna ekatvaṃ prakalpayati /* (「一方、言葉は作り出されるものであるという見解では、いったん発声された音素あるいは語が再び発声されるときには、『これはそれと同じである』という同一の知が逸脱なく生起する。これが同一性を根拠付ける」)

を表示する。あるいは例えば *akṣa* 等の語は [車軸、眼、さいころ等の複数の意味を表示する]。

[VP3.7.58.3] *tatra karmakarṭṛviṣaye viklittimātra-vacanaḥ paciḥ, pacyate odanaḥ svayam eveti / devadattasya kartuḥ pratyayenānabhidhānāt tadvyāpāra-syātra dhātuvācyatvābhāvaḥ /*

その [問題の] 〈目的・行為主体〉の領域では、動詞語根 *pac* は、*pacyate odanaḥ svayam eva* (「粥がまさにのおのずから煮える」) というように軟化作用だけを表示する。デーヴァダッタという 〈行為主体〉は接辞 [-*te*] によっては表示されないから、その [デーヴァダッタという 〈行為主体〉の] 〈ハタラキ〉は動詞語根 [*pac*] の表示対象ではない。

[VP3.7.58.4] *pradhānabhūto hi pacyartha viklittiḥ, sarvatra sambhavāt / apekṣite 'pi hi karṭṛvyāpāre devadattaḥ pacatīty atra viklittiyarthatvād vikledanasya karṭṛvyāpārasārthena rūpeṇa viklitter eva prādhānyāt, atra ca dvayasyābhidhānāt samūhavṛttitvam / atraiva dvyarthatopapattir uktā /*

実に動詞語根 *pac* の主要なる意味は軟化作用である。なぜなら、[〈行為主体〉の 〈ハタラキ〉が期待される場合もそうでない場合も] いかなる場合においても [その軟化作用は] あり得るからである。実に、〈行為主体〉の 〈ハタラキ〉が期待される場合も、[例えば] *devadattaḥ pacati* (「デーヴァダッタが煮ている」) というこの表現においては、〈行為主体〉の 〈ハタラキ〉である軟化せしめる作用は軟化を目的とするから、現実のものレベルでは (ārthena rūpeṇa) 軟化こそが主要素であり、さらにこの場合には [軟化と軟化せしめる作用の] 二者が表示されるから [動詞語根 *pac* はそれらの] 集合を指示するからである。まさにこの意味において [動詞語根 *pac* が] 二者を意味するということ (dvyarthatā) が説明付けられると言われる。

[VP3.7.58.4] *karmakarṭṛviṣaye tu karṭṛpratyayasābhāvāt tadvyāpāro bhāvanā nābhidhīyate / karmaiva hy atra kartā, tadvyāpāraś ca viklittir eveti saivābhidhīyate /*

一方、〈目的・行為主体〉の領域では、[主要なる] 〈行為主体〉を表示する接辞は存在しないから、その [主要なる 〈行為主体〉] の 〈ハタラキ〉である生成作用は [動詞語根によって] 表示されない。なぜなら、この場合 〈目的〉自体が 〈行為主体〉であり、そしてその [〈目的〉] の 〈ハタラキ〉は軟化に他ならないから、まさにその [〈軟化〉] こそが [こ

の場合の 〈行為主体〉の 〈ハタラキ〉として動詞語根によって] 表示されるものだからである。

[VP3.7.58.5] *tadyathā viklidyanti siddhyanti taṇḍulā iti viklitter eva karṭṛvyāpārasābhidhānam / evaṃ bhidyate kusūlaḥ svayam eveti dvidhābhavanam dhātvarthaḥ / bhinatti kusūlam devadatta iti tadupasarjanaṃ dvidhābhavanam ity udāhāryam //58//*

例えば、*viklidyanti [taṇḍulāḥ]* (「米が柔らかくなっている」)、*siddhyanti taṇḍulāḥ* (「米が煮えている」) においては、軟化こそが 〈行為主体〉の 〈ハタラキ〉として表示される。同様に、*bhidyate kusūlaḥ svayam eva* (「穀物瓶がまさにのおのずから壊れる」) においては分離作用 (dvidhābhavana) が動詞語根 (*bhid*) の意味である。

[一方] *bhinatti kusūlam devadattaḥ* (「デーヴァダッタは穀物瓶を壊している」) においては、分離作用はその [〈行為主体〉] であるデーヴァダッタの 〈ハタラキ〉の従属要素として [動詞語根 (*bhid*) の意味となる] ⁵⁶。

このように例証されるべきである。

参考文献・略号

A: Pāṇini's *Aṣṭādhyāyī*.

Abhyankar, Kashinath Vasudev

1962–72 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali*, edited by F. Kielhorn, third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by K. V. Abhyankar. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. 1: 1962; 2: 1965; 3: 1972.

1962 *The Paribhāṣenduśekhara of Nāgojibhaṭṭa edited critically with the commentary Tattvadarśa of MM. K. V. Abhyankar. Part I.* Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

赤松 明彦

1998 『古典インドの言語哲学1 グラフマンとことば』(東洋文庫 637) 平凡社

『古典インドの言語哲学2 文について』(東洋文庫 638) 平凡社

Giridhara Śarmā Caturveda and Parameśvarānanda Śarmā Bhāskara

1958-61 *Śrī-bhaṭṭojī-dīkṣita-viracitā vaiyākaraṇa-siddhānta-kaumudī śrīmadvāsudeva-dīkṣita-praṇītayā bālaṃanoramākhyā-vyākhyayā śrīmaj-jñānendra-sarasvatī-viracitayā tattva-bodhiny-ākhyā-vyākhyayā ca sanāthitā.* 4 vols. Varanasi: Motilal Banarsidass.

⁵⁶R: *tadupasarjanaṃ dvidhābhāvanam. dvidhābhavanam* に代わる *dvidhābhāvanam* の提案を採用すれば、「その [分離作用] を従属要素とする分離をもたらす作用」という意味になる。

Kielhorn, Lorenz Franz

1980–85 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali*. 3 vols. Bombay Sanskrit and Prakrit Series, 18-22, 28-30. Bombay: Government Central Press. 1: 1880, 2: 1883, 3: 1885; reprint: Osnabrück: Zeller, 1970. 2nd edition: 1: 1892, 2: 1906, 3: 1909. 3rd edition: see K. V. Abhyankar [1962-72].

KV: *Kāśikāvṛtti*: Vāmana and Jayāditya's *Kāśikāvṛtti*. See Miśra [1985].

MBh: Patañjali's *Vyākaraṇamahābhāṣya*. See Abhyankar [1962-72].

Miśra, Śrīnārāyaṇa

1985 *Kāśikāvṛtti of Jayāditya-Vāmana, along with Commentaries Vivaraṇapañcikā—Nyāsa of Jinendrabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Miśra*. 6 vols. Ratnabharati Series 5–10. Varanasi: Ratna Publications.

Nyāsa: Jinendrabuddhi's *Nyāsa*. See Miśra [1985].

Ogawa, Hideyo (小川 英世)

2000 「バルトリハリの〈能成者〉論」『インドの文化と論理 戸崎宏正博士古希記念論文集』(九州大学出版会) 533–584

2005 *Process and Language: A Study of the Mahābhāṣya ad A1.3.1 bhūvādayo dhātavaḥ*. Delhi: Motilal Banarsidass.

2006 “Being an agent.” 『比較論理学研究』4: 93–99.

2007 「Vākyapadīya」〈能成者〉詳解」(Sādhanaśamuddeśa)の研究—VP3.7.45–54: 〈目的〉(karman) 論序」

Padamañjarī: Haradatta's *Padamañjarī*. See Miśra [1985].

PIŚ: Nāgeśa's *Paribhāṣenduśekhara*. See Abhyankar [1962].

Pradīpa: Kaiyaṭa's *Pradīpa*. See Vedavrata.

Prakāśa: Helārāja's *Prakāśa*. See Subramania Iyer.

Raghunātha Śarmā (Sharmā)

1979 *Vākyapadīyam, Part III, vol. 2 (Bhūyodravya, Guṇa, Dik, Sādhana, Kriyā, Kāla, Puruṣa, Saṅkhyā, Upagraha and Liṅga Śamuddeśa) with the Commentary Prakāśa by Helārāja and Ambākartrī by Pt. Raghunātha Śarmā*. Sarasvatī Bhavana Grantha-mālā, 91. Varanasi: Sampurnanand Sanskrit University.

Rau, Wilhelm

1977 *Bhartṛhari's Vākyapadīya: Die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen*. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XLII, 4. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

SK: Bhaṭṭoji Dīkṣita's *Vaiyākaraṇasiddhāntakaumudī*. See Giridhara Śarmā Caturveda and Parameśvarānanda Śarmā Bhāskara.

Subramania Iyer, K. A.

1963 *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Commentary of Helārāja, Kāṇḍa III, Part I*. Deccan College Monograph Series 21. Poona: Deccan College.

1966 *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Commentaries Vṛtti and Paddhati of Vṛṣabhadeva*. Deccan College Monograph Series 32. Poona: Deccan College.

1983 *The Vākyapadīya of Bhartṛhari (An Ancient Treatise on the Philosophy of Sanskrit Grammar), Containing the Ṭikā of Puṇyārāja and the Ancient Vṛtti, Kāṇḍa II, with a Foreword by Ashok Aklujkar*. Delhi: Motilal Banarsidass.

辻 直四郎

1974 『サンスクリット文法』(岩波全書) 岩波書店

Uddyota: Nāgeśa' *Uddyota*. See Vedavrata.

Vedavrata

1962–63 *Śrībhagavat-patañjali-viracitaṃ Vyākaraṇa-Mahā-bhāṣyam (Śrī-kaiyaṭa-kṛta-pradīpena nāgojibhaṭṭa-kṛtena-bhāṣya-pradīpodyotena ca vibhūṣitaṃ)*. 5 vols. Gurukul Jhajar (Rohatak): Hairyāṇā-Sāhitya-Saṃsthānam.

VP: Bhartṛhari's *Vākyapadīya*. See Rau.

(おがわ ひでよ、広島大学 [インド哲学])